

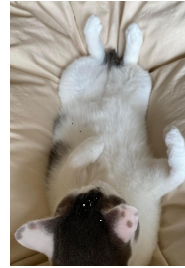


等求慈くんの鼻先 Vol.1

「禍下、イロイロ」

猫を飼い始めて三年経て、2月22日（猫の日）ニャンニャンニャンニャンニャンニャン（2が六つあるのだから、6回ニャン）の日を迎えられて幸せと感じている。

夫が一番という我が家の猫だが、夫が留守の時には、私にも少しはなつき、餌をねだる。安堵して腹



を見せて転がる姿に、こちらも大変癒される。猫を飼って間もなく、夫が鬱病を発症した。コロナが影響する職場のパワハラが原因であった。猫がいなかったらどうなっていたかと思う。猫は、夫が保護猫シェルターで出会い我が家に連れてきた。夫は何も出来ない、動けない状態でも、猫の餌やりとトイレ掃除だけは、やっていた。やるべきことがあるのは、本当に大切であるとその姿を見て痛感した。発症から二年近く経て、夫の状態も落ち着き、我が家には日常が戻ってきた。さてコロナ禍が長引く中、様々な出来事が、起きている。コロナの感染がなかったら、こんな展開には、ならなかっただろうと思えることが多い。忸怩たる思い、悔しさがにじむ出来事も多い。

私は、街中の駅からも近く大変恵まれ

た場所にある認知症高齢者の方たちが住むグループホームで働いている。

一昨年、このグループホームがある町会の町会長さんが世代交代し、60代の元気いっばいな方が町会長さんになった。様々な企画を提案し、コロナ禍でも工夫して少しずつイベントも開催してきた。女性の時代だと女性メンバーを大切にされ、私も声掛けしてもらい、町会のメンバーに加えてもらった。先月は防災の学びの場に町会長と一緒に参加させてもらった。

「町会のなかにある施設は大切だ。助けて助けられの関係を育てて行こう！」と、いつも言っていて下さった。その彼が急逝した。循環器の疾患があり爆弾を抱えていたといえるが、早朝の散歩先で倒れ、搬送先がなかなか決まらず、救急車内で亡くなった。心不全だった。全国で似た事例が増えている。搬送先の病院がない。感染症対策で手いっぱい病院が増えている。助かる命が消えている。やるせない。

「さあ、これからという時に逝ってしまいました。」

これは告別式、出棺の際の家族の言葉。手帳は一年先まで様々な繋がりを展開する予定で埋まっていたそうだ。涙が止まらない。

40代で介護の仕事を始め、4年目にグループホームの管理者になってしまった私は、経験もなく孤軍奮闘の時期もあったがどうかこうにか15年間、続けてきている。

そして、学びの場を通して、友人であり

相談相手、また大事な師でもある管理者仲間に出会った。その友人の一人が心身の不調に陥り、退職に至った。私と共に都の認知症研修の講師をしている彼はテキスト、講義のシラバス（授業計画）を常に再考し、伝えたいことが伝わるための工夫を怠らない。私と志を同じとする友は年は若い、私よりキャリアも長い。彼のホームには認知症高齢者の人としての暮らしがあった。ターミナル期でも必要があれば、ホームに受け入れて看取りを実践していた。

彼の施設でクラスター感染が起きた。修羅場の中、経営人の営利本位の判断と言葉が、彼の心を砕いた。

現場の最前線で戦う彼に向けられた言葉が「ひどいことになったな。訴えられるかもしれない。お前のせいだ。」

ただ、良き仲間にも恵まれ、素晴らしい実践を長くしてきた彼は簡単には潰れない。心療内科に通っているが、バランスを取り戻しつつあり、再就職先もきまり、徐々に回復してきている。

タイトルの等求慈は我が家の猫の名前である。

研修で講師としてお会いしたAさんの包容力のある優しさに触れ、自分の未熟さを再確認し、原稿をお願いしました。知りたいことがなかなか見えない世の中です。Aさんの等求慈くんの鼻先で感じたことを綴って頂きました。